

## ⑧ なぜ、百田弓矢比売命は吉備津彦命の妃に？

「豊葦原の瑞穂の国」の意味を大辞泉で調べてみますと「神意によって稲が豊に実り、栄える国」とありました。このことは、弥生時代に水稻栽培が始まって以来、米つくりを生産の基本としてきた日本という国を象徴するものでありましょう。

そこには、当然豊作を祈る農耕祭祀が始まりました。百田大兄命がこの地に田を起し米をつくり農耕祭祀の神として祀られたことは、大井神社に伝わる年中の例大祭に見られるとおり明らかです。

しかし、時により、例えば崇神天皇の御代、温羅征討のため四道將軍の一人として吉備津彦命（彦五十狭芹彦命）が西道（吉備の国）に遣わされたとき、「いち早く味方した百田大兄命は、吉備の道の口（現在の兵庫県加古川市大野の日岡神社）にこれを迎え、前ツ国から中ツ国へ案内し吉備の中山を本拠「国見の丘」として布陣した。」といます。（「吉備津神社縁起」）

この時のことを河田王彦宮司は大井神社の鐘に「共吉備津彦、合力征温羅」と刻しています。農耕神であっても時に大きな戦もいとわぬ力の源泉は果たしてどこにあったのでしょうか。そこで目を付けて頂きたいのが、大井宮山を取り巻く山々谷々に刻まれた古代採鉄の跡を物語る凸凹の山容と今に伝わる小字地名です。

地図を見ますと、ここで原料（砂鉄）採取から製品への加工、出荷まで一貫して行われていたことがうかがえます。

そして当然ながら鉄は農具として有用なばかりでなく、武器の製作にも重宝されたに違いありません。

百田大兄命は、この貴重な鉄を手にしていたのではないのでしょうか。吉備津彦命のもとに



犬、猿、雉子に例えられる良将がいましたが、新参者とはいえ鉄製の武器を携える百田大兄命の部隊は温羅征討軍内一の力を誇ったことでしょう。



古代タタラ製鉄の様子:和鋼博物館

百田大兄命の娘が吉備津彦命の妃となった百田弓矢比売命です。この「弓矢」という言葉の意味をどう受け止めれば良いのでしょうか。父大兄命が田起こしに使ったスキ、クワの対極としての鋭利な鉄製武器を象徴するものなのでしょうか。

そうだとすれば、吉備津彦命が弓矢比売命を妃に迎えたということは、それまでの石や木製の武器に代わる鉄製の武器、広義には産鉄・製鉄権を掌中にしたと考えることもできます。つまり、「鉄」が吉備津彦命と弓矢比売命の縁結びの役を務めたのかもしれませんが。



久田で発掘されたタタラ炉壁

ここだけの話し、多分、吉備津彦命は「鉄」に目がくらんだのでしょうか。

## 参考

- 1) 正倉院文書 備中国大税負死亡人帳 … 天平11年(739)のもの  
賀陽郡死亡人貳拾参人 免税老阡老伯貳拾束伍把  
大井郷死亡人貳人

粟井里 戸主 東漢人部刀良手 拾束 天平十一年六月六日死

- 2) 平城宮跡出土木簡 … 天平17年(745)から19年頃のもの  
大井鋏十口 九月十日

これらの史料から、この地域に渡来系の人が賀陽郡で20%、都宇郡で40%も居たこと、またこの地域から鉄製鋏が貢納されていたことがわかります。



大井鋏十口

島根歴博  
TATARA

百田地区から南800mにある総社市奥坂の千引カナクロ谷製鉄遺跡は、6世紀後半の全国最古のもので、鉄に関する高い知識を持った渡来系技術者が関わったことは間違いないと考えられています。これらの人達が持ってきた技術により、吉備の製鉄が盛んとなり古歌に真金吹く吉備…と歌われる鉄の一大産地に成長したのです。

( 吉備の渡来文化：平成17年 岡山県立博物館 )